市史の窓 No.12

久世廃寺から日本最古の誕生仏出土

去る三月三十一日、遺跡久世廃寺（久世芝ケ原、久世神社境内南側）南端を発掘調査中、作業中の近藤泰行氏の鍬に〝ガリッ〟と軽い手応えがあった。

慎重にとりあげてみると、小さいわりにはずっしりとした重みが手のひらに伝わってきたという。土を落してよく見ると、黄金の地肌をのぞかせて右手を高くさし上げた小さな仏像であった。

「金のホトケさんやで」「まるでウルトラマンみたいなかっこうや」……と、発掘現場ではひとしきり話しがはずんだ。

今回発見されたこの仏像は、青銅の上に金箔をほどこした高さ十一センチで誕生釈迦立像とよばれています。光背と台座は見つかっていませんが、ほぼ完全な姿で、奈良～平安初期のものと判定されました。現存するこの種の仏像では、日本で最も古い部類に入ることがわかりました。

発見場所は、久世廃寺の南門付近の瓦堆積部（地表下約五十センチ）の中でした。

城陽市には久世廃寺の他に、平川廃寺や正道官衙遺跡があり、また宇治市にある広野廃寺も含めて古代寺院が密集した地域として、大和の飛鳥や難波地方の寺院群とならぶ重要なところです。

平川廃寺からも発掘調査により土でできた塑（そ）像とよばれる仏像の破片が数多く出土しています。これらが焼けてこなごなになっていたことや、金銅製の仏像が土に埋もれていたことなどから、久世・平川両廃寺の出土状況は、共通して混乱した情勢の中で寺院が崩壊したことを示すものと考えられます。

車塚をはじめとする古墳群から、この久世廃寺にいたる遺跡の規模や年代などを考えると、古代の城陽には発達した生産力に支えられた高度な文化と強大な地方権力が存在し、「幻の久世の郷」とでもいえるような古代文化の先進地であったことがわかります。

この史実が、当時の中央政府の作った歴史書にほとんど記されていないことを見るとき、そこに何か血なまぐさい権力争いと、庶民の悲惨な運命があったのではないかとも推定できます。

ともあれ、今後の発掘調査と研究によって、この秘められた歴史の真実を明らかにしていきたいものです。